

# 大雪山の素顔

だいせつざんのすがお

このコーナーでは、山岳ガイド、旭岳ピジターセンター、自然解説員など旭岳で活躍する人たちをリレーして、季節とともに変化する旭岳の句のお便りをお届けします。

高山植物、紅葉、雪、動物など「自然の大博物館」と言われる大雪山の素顔が見えてくることでしょう。



写真：松野智久（写真家）

## スロー スノー ライフ Slow Snow Life in 大雪山

自然の中で過ごす時間や生活は、街でのそれと比べると、かなりのスローライフ。

それでも、春～夏～秋の大雪山は、新緑だ！花だ！紅葉だ！登山だ！と、自然も人も忙しそう。そのような、目に入ってくる色や物が多い季節とは違い、白銀の世界が広がる大雪山の冬は、見ていてとてもシンプルで、そして、とても心地よいスローな時間がある。

景色だけじゃなく、冬は自分の暮らしも、シンプルになる。「あの国へ行きたい～、どこか違う所へ行きたい～」と欲の塊のような私だったけれど、この大雪山を一望できる東川に移り住み、さらに、冬をこよなく愛す仲間達に会い、「遠くの国より、近くの雪景色」と思うようになった。

冬の朝は、なぜか夏の頃よりも目覚めが早い。窓から、朝日によってゆっくりと輪郭をはっきりさせてゆく大雪山の山々のシルエットを眺める。

「今日は、どの服着よう？」などと悩むことなく、スキーパンツに着替える。

外に出れば、すでに足元に素敵な雪景色が広がっている。シンプルという最高の贅沢！

そして、ふわふわパウダースノーの中でのスローな時間。山頂をめざし、ただただ決められた登山道しか歩けない夏と違い、冬は、雪のおかげでどこでも歩ける。静かな森の中では、まさに、「雪が"しん・しん"と降っているかのよう。

と、こんなまったりスローな時だけではなく、極寒だったり、吹雪いてホワイトアウトになったり、雪が重くて歩くのが必死だったりすることもある。

そんな時、自然について、そして自分自身について見つめなおしたり、また、そんな時間を共有している相手のことを思ったりする大切な時間となる。

こんな大雪山でのスローな、スノーライフが、またはじまった……

文：青木倫子（旭岳パークレンジャー）

## 短歌

住職の法話身に沁む齢になり残り少なき日々を安らく

過ぎゆきの乙女心の憧れに似たる思ひのどうだん燃ゆる

この秋はきのこが豊作だったらし落葉きのこ度々もらう

ファイターズ優勝なせば八工場朝五時出勤フル操業す

クラス会腕白残るその顔で想い出ばなし貧しき戦後

孫娘の結婚の宴華やぎて笑顔輝き花吹雪舞う

電線に数かぎりなく渡り鳥刈田もなえて季深みゆく

何欲しと云うにはあらねど娘とふたりデパート歩く時とおしむ

早朝に霜草ふみつつ散歩すももう聞もなくや除雪のなやみ

朝のニユースは残酷にして報らさるる真白の牛乳飲み干すときに

夕々に級友との語りに花が咲きつるべ落としの秋深まりぬ

一寸先解りはない現し世に来年花咲く球根植える

染まるべきものにあらねど緋の色のどうだん躑躅に戸惑ひてゐる

九十を越したる世界予想せず今さらなれど少し慌てる

## 俳句

秋深し流れる地歌孫に継ぐ

街騒にまぎれし夫や秋のくれ

夢浅し森のそよぎに秋の声

逝く秋の夜汽車の汽笛挽歌かな

鐘の音の余韻フと止み秋の声

秋深し空白埋めし友の来る

銀杏散る葉陰にのぞく実二つ三つ

秋声や背で風受く山頭火

赤き糸解けずに暮す神無月

秋深し葉は地にありて天広く

冬立つや右手の麻痺の癒えきれず

青野 公花  
秋山 深雪  
杉山 ひろのり  
小林 露葉  
徳光 吐苦  
杉山 吐苦  
山口 佐知子  
石澤 清宏  
澤田 久美子  
松山 蓉子  
宮坂 紫雲

那須 昭喜  
瓜生 昭枝  
岩田 ふじえ  
岡澤 ちず子  
笹田 富士子  
永江 栄子  
矢沢 ますえ  
中田 治子  
清水 治子  
宮坂 敬子  
嶋崎 ミエ子  
松倉 和一子  
井山 一沙子  
尾池 真沙子